

世界の人びとのための J I C A 基金活用事業・業務完了報告書

1. 業務の概要：	
(1) 事業名	「ザンビア共和国：孤児およびストリートチルドレンのための奨学金支援事業」(通常枠)
(2) 実施団体名	特定非営利活動法人礎の石孤児院
(3) 実施期間	2019年11月15日～2020年11月14日
(4) 実施国	ザンビア共和国
(5) 活動地域	ザンビア共和国 ルサカ州ルサカ県ルサカ市 在宅孤児支援：ンゴンベ コンパウンド(貧困区) ストリートチルドレン支援：アヴォンデール区
(6) 活動概要	
①活動の背景：	
<p>当団体では主に、A、在宅孤児支援とB、ストリートチルドレン支援を行っている。</p> <p>A、在宅孤児支援</p> <p>ザンビアでは、HIV や貧困を原因として親を亡くした孤児の救済が長年の課題である。農村地区において、24 時間保護型の孤児院の運営、そして都市部において在宅孤児への就学支援を行ってきた。</p> <p>しかし、日本とほぼ同等な物価であるザンビアにおいて、24 時間保護型の孤児救済は、経済的にも非常に厳しく、どうしても人数を少数に限定せざるを得なかった。また政府の方針としても近年は、孤児は在宅のまま、孤児院の役割は「教育支援」と位置付けられるようになってきている事も相まって、当団体でも現在は在宅孤児への就学支援に重点をシフトしている。</p> <p>特に現金が必要とされる「教育」は、保護者の経済を圧迫するため、孤児が親戚をたらい回しにされたあげく就学させられずに放置され、結果として路上で物乞いを始めてストリートチルドレンとなってしまうたり、ドラッグあるいは窃盗等の犯罪に加わったり、早婚などして貧困の悪循環の中に陥ってしまうケースが非常に多い。</p> <p>B、ストリートチルドレン支援</p> <p>首都ルサカには、主に貧困と虐待から路上へ逃げたストリートチルドレンが約 1 万 4 千人いると言われている。</p> <p>当団体ではシェルターを運営し、教育支援、給食、技能訓練、トラウマカウンセリング等を行い、子ども達が路上生活から抜け出し、社会の一員としてプロダクティブに人生を歩めるように支援している。</p>	

②活動の目標：

A, 在宅孤児への就学支援

学資を支援することによって、保護者の負担を軽減し、孤児たちが安心・安定した環境にて1年を通して教育を受けることができるようになることを目標とする。

B, ストリートチルドレン支援

現在保護している男子約60名の中でも、34人の初等教育対象者を選定し、奨学金をよって通年安定して教育を受けられるようにする。また、多くの子どもが、ドラッグ中毒からの脱却のプロセスの中にある。特に空腹がドラッグへの欲求を誘発するため、給食費を得て1日3食を提供し、肉体的にも精神的にも充足した中で勉強し、日常を送れるようにする。

2. 業務実施結果：

(1) 実施した内容・成果

活動実施期間中、コロナによって3~9月までザンビアの全学校が閉鎖されるという特殊な環境であった。

【実施内容 A, 在宅孤児支援】

1、孤児の家庭訪問

貧困の中にいる孤児たちの家庭環境は、基本的に全てにおいて不安定である。同居する家族・親戚のメンバーや健康状況、主な収入源などが頻繁に変化する。そのため、最初に行った孤児選定時の家庭環境を示すデータから大きく変化する事も多い。故に定期的に家庭訪問し、観察し、インタビューを行うことによって、孤児の流動的な生活実態をより正確に把握し、支援へと結びつける事が可能になる。

特にコロナ渦にあって、経済が非常に悪化した半年の間に、ほぼ9割の孤児家庭の住所が変わり(家賃が払えず、夜逃げしたため)、かつ家族全員に飢えが蔓延していた。そのような状況下で、定期的な食糧品等の支援、医療措置の支援、就職支援等を行うことができた。

2、文房具等の購入と配布、授業

その日の食事にも事欠く孤児の家庭では、教育に関わる全ての出費が難しいため、1年分の文房具、衣類、靴、靴の購入を行い、随時必要に応じて配布した。

子ども達は、非常に熱心に、快活に勉強し、遊び、過ごすことができた。年齢と学年が合致する事はむしろ少なく、各児童の学力のアセスメントを行い、能力に応じたクラス編成をする事が大切である。

なかには学習障害と見られる児童が何人かおり、任地で暴動が起こり、ルサカに避難して来ていた青年海外協力隊員が、特殊教育を助っ人として担当してくれた。その後、専門のスタッフを配置する事ができた。

3、給食の無料提供

孤児たちは家庭では1~2食が普通であり、しかもバランスのとれた内容、量とはほど遠いため、常に栄養の偏りかつ空腹状態である。そこで、教育も大切だが、その前段階で、生命と健康を守ってあげる事も重要で、しかも空腹では勉強にも集中できるはずがないと、昼食の無料サービスを始めた。

また、中にはHIV陽性の子もおり、毎朝服用しなければいけない薬が、空腹に非常に強く作用して、学校でぐったりとしている姿も見られたため、朝食のサービスも、少しずつではあるが始めたところである。

子ども達にとっては、お腹いっぱい食べれる給食が、学校に来る大きな楽しみ、喜びになっている。

4、孤児との面談

孤児たちは家庭において、同居する家族や親類間による暴力(性暴力も含む)やアルコール依存などの問題に曝されている事が多々ある。

また、緊急事態が家庭で起き、授業中上の空だったり、食欲を無くしていたりする様子が見受けられる場合は面談し、そこから家庭訪問、そして支援に繋げてきた。

私たちは常に、子ども達のメンタル、フィジカル両方の状態を観察し、面談し、時には医療機関の手配等も行ってきた。

【実施内容 B, ストリートチルドレン支援】

1、奨学金の給付による教育活動

約34人の初等教育対象者に月曜日~金曜日まで毎日授業を行うことができた。

ストリートに生きるほとんどの子ども達にとって、『学校に行く』というのは第1の希望である。その為、意欲は高いのだが、鉛筆を持ったこともない子、椅子に座ってじっとしてられない等、クラスをまとめながら教えるのが、先生にとって課題であった。それでも、少しずつ理解し始めると、楽しみながら参加できるようになり、授業時間外にも自習する姿が見られるようになった。

2、給食サービス

路上で暮らす子ども達にとって、耐え難い空腹を忘れさせてくれるものがドラッグである。そのため空腹とドラッグ欲求は固く結びついてしまっているため、1日3食しっかり食べることが、中毒から抜け出す重要なプロセスになる。

この一年間、安定して3食の給食を提供できたことは、ストリートチルドレンに対応するにあたって、その他の多くのことをも可能にした(例えば、食べ物を巡ってケンカする事がなくなった事や、料理の楽しさを発見して、技術訓練で調理師の道に歩んだ者が出た等)。

3、カウンセリング

家での虐待や、ストリートの生活の中での体験によって、子ども達は、様々なトラウマを負っている。このトラウマによって、人との信頼関係を結べなかったり、怒りがコントロール

ールできないなど、社会生活を送るのに阻害要因となってしまうため、専任のトラウマカウンセラーが随時カウンセリングを行った。

対応した子ども達は、ほとんどの場合、半年から一年で変化が見られ、落ち着いて集団生活に溶け込む事が出来るようになっている。

4、家庭訪問

コロナの影響により、家庭訪問は中止としたが、学校が再開した後、本人だけの訪問を許可している。

5、アウトリーチ

保護している約 60 人以外にも、まだ路上で生活しているストリートチルドレンへの支援も続けてきたが、コロナにより、自粛せざるを得なかった。

コロナ渦の中で、大勢が外出を自粛した時期などは、通行人も減り、レストラン等も閉まったため、物乞いができずに、非常に苦労していたようだ。警察が一斉に取り締まり、異なる施設に送り込んだものの、その多くが脱走して、またストリートに戻ったなどという事もあったため、私たちも非常に心配していた。

11 月にアウトリーチを再開。溜まり場に行き、食糧の配布と看護師による怪我の治療などを行うことができた。

人数が増えていたこと、女の子達のお腹が大きくなっていったこと…更なる支援の必要があると痛感させられた。

(2) 得られた教訓など：

A、在宅孤児支援

コロナ渦の 7 ヶ月の休校中、子ども達が飢えることがないように、月 1 度の食糧等の配布による支援をしてきた。しかし、経済的な限界もあり、十分と言えるものではなかった。この特殊な環境の中で、コンパウンドの飢餓が深刻化し、満足に食事できていなかった児童のひとり(HIV 陽性)は結核を発症し、学校再開後も 1 度も通学できないまま亡くなってしまった。家族には治療費や葬式代もなく、あらゆる支援が求められた。

元々が、貧困の蔓延するコンパウンドでの事業で、悲惨な事例は次々と起きる。雨によって泥レンガの家が倒壊し、建設中の家に身を寄せるしかできない子などもあった。

これらの経験から、子どもの教育のみでなく、家族、コミュニティへのエンパワーメントの必要性と、それを現場最前線で担うスタッフ養成の重要性を痛感している。特にザンビアでは、外国人に依存して過度な期待を持つ傾向があるため、団体の理念、方針を理解し、パッションとコンパッションを共有しながら協働できる現地スタッフの存在は貴重である。

B, ストリートチルドレン支援

コロナ渦で訪問者や外出の相当な制限が行われたにも関わらず、不平不満を言ったり、フラストレーションで喧嘩する事もなく、非常に落ち着いて生活出来ていた事は、嬉しい驚きであった。

授業を続けられた事と、しっかりと食事がとれていた事も、この状態を保てた大きな一因であると考えている。

コロナの脅威をきちんと理解し、協力する気持ちを持ってくれた事と、スタッフ達や仲間達との信頼関係が、成熟の域に達したのであらうと感心していたのだが、外出制限が解除されるとすぐに、数人が姿を消してしまった。確認すると、ひとりにはドラッグに走り、他の数人は、家族の事が心配で様子を見に家に戻ったとの事。全員が後に戻って来た。

スタッフの許可さえ得れば、外出は認められることになっているので、別に逃げる必要はなく、そこが少し残念でもあった。

また、今まで施設にて生活していた年長の子が、就職できたり、自分でビジネスを始めて自立していった姿を見れた事も、年少の子どもたちにとって、勉強するモチベーションとなっていたと思う。

かつてはどんな支援をしても、結局はストリートに戻り、ゴミを漁るような生活に戻ってしまう子どもたちも多くいたが、この1年は、様々な誘惑と闘いながら必死に就職活動し、そして勝ち取った彼らが、とても良いお手本になってくれた事は、私たちスタッフにとっても大きな励みとなった。

(3) 今後の活動・フォローアップの方針：

A, 在宅孤児支援

今後、さらに多くの孤児たちを救済するために、土地を購入し、学校等の建設を目指していく。同時に孤児家庭、コミュニティへのエンパワーメントの方針と計画を定め、進めて行く予定である。

今までのところ、現地スタッフたちは、地域からのプレッシャーや、病気の児童への対応で、時に、トラウマを負ってしまうような体験など、様々な困難や挑戦の中で頑張ってきているが、今後は必要とされるトレーニングや研修に積極的に参加できる機会をつくり、よりプロフェッショナルな働きをなしていけるように手助けしたい。

B, ストリートチルドレン支援

ほぼ半年ぶりにアウトリーチを行うことができ、懐かしい顔触れとの再会となったが、気持ちとしては、『生き伸びてくれたか〜』という感慨が強かった。

コロナで自粛が広まり、レストランなども閉まった事から、通りににはひと気が少なくなり、物乞いもできずに、それでもよく生きていてくれた…しかしコロナはまだ予断を許さず、経済は改善せずにこれから更に悪化する見通しであり、重ねて、大荒れが予想されている来年8月の大統領選挙と、社会情勢の悪化に伴って、これからますますストリートチルドレンの数は増え続けるはずである。

これから更に多くの子どもたちを受け入れられるように備え、警察や政府機関との連携を強めることも重要と考えている。

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

今年度はザンビア全土で暴動が起きたり、コロナによる休校、経済の悪化に伴う物価の高騰、1日10時間以上の停電が年間を通してあったことなど、非常に特異で社会不安が広まった1年であった。そのため、常に情報収集とその共有に勤め、有事の際には素早く決断をする体制をいつもにも増して強化した。

特にコンパウンドでは、人々が暴徒化し、略奪に走りやすいため、コミュニティ内での信頼関係を築いていく事が、結果として自分たちを守る事になる、という意識を高める必要があった。

(2) 活動の写真

A, 在宅孤児支援



授業風景



ソロバン授業



給食



独立記念日のお祝い



家庭訪問(母親が重度の心臓病である)



孤児家庭への食糧等支援

B. ストリートチルドレン救済



学習風景.



給食風景



配膳の様子(後方に野外キッチン)



過去の体験や思いを分かち合う



溜まり場へのアウトリーチ



食事の配布には長い行列ができる



少女たち その多くが妊娠している



看護師によるキズの手当ての様子

(3) JICA 基金活用事業を受託したことで団体の成長につながった点・良かった点

1年を通して、いくつかの最も重要なコストへの支援を得られた事によって、事業の土台が安定して、1年を通じた活動計画が作りやすくなった。そして同時に、その他の出費に関して余裕ができて、より幅広く現場のニーズに応じていくことが可能になった。

特に緊急に医療措置が必要なケースや、こども、家族が死亡した場合にも遅れることなくサポートできるようになった事は、非常にありがたい事であった。

また、事業計画や報告書を作成し、繰り返し振り返ることによって、自分たちの目指すものと、それを達成するために必要な事、不足している事、更なる可能性等への気づきを与えられ、将来的なビジョンを広げる事が出来た。